

2019. 5. 14

畑 啓之

「哲学対話」が有名大学合格へと導く リベラル・アーツの勝利か

まず、本日の日本経済新聞の見出しは衝撃的です。曰く、「偏差値 40 から上智大」。しかも、ここ 3 年、有名大学や公立大学への進学者が相次ぐとあります。

それを実現した原動力は「哲学対話」。哲学というツールを通して自分自身を見つめなおせた結果でしょう。この対話がなければ、偏差値の低い高校の常識にとらわれ、その範囲でしか物事が考えられなかったことでしょう。

「哲学対話」とは何か？ これを紐解くと、古代ギリシアのプラトンに行きつきます。最近の言葉では「リベラル・アーツ」と言うのでしょうか。

少し長くなりますが、リベラル・アーツとは、

リベラル・アーツは、我々の思考や思想において、様々な視点を持つことで「制限されない＝多様な価値観を選択していく」スキルを習得する学問で、名前の通り「自由を創造する」（リベラル＝自由 アーツ＝芸術・人の創造物）ことを目的とした学問です。自身の固定観念からの脱却です。

起源は古代ギリシアにまでさかのぼります。当時、プラトンが説いた「数学的諸学科の自由な学習」がその原型にあたると言われています。プラトンは、当時の技能・技芸であった体育や詩歌や文芸に加えて、哲学的な問答も人が持つべきスキルの 1 つと考えました。そこでそのスキルを習得するために、「数論」「算術」「幾何学」「天文学」の 4 つを具体的な学びの題材としました。

古代ローマでこれらの題材は整理と統合され、「自由 7 科目」として正式な定義がなされた後、現代のリベラル・アーツへとつながっています。

新聞記事の大学生は、偏差値の低い高校で自身の囚われていた固定観念を払拭し、自身の目的に向けて歩むことができたということでしょう。

話は変わりますが、ある時突然に東大への入学者が増えた高校があります。兵庫県の灘高校

キセキの高校

偏差値40から上智大



社本理江さんは都立大山高から上智大外国語学部英語学科に合格した(東京都千代田区)

「哲学対話」が私を変えた

自分の意見を言える。「対話の前は思っても中学時代はできなかった。みなかったような考え」が、自分の中から生まれ、自分の哲学対話だ。

社本理江(19)は、上智大(東京都千代田区)の外国語学部英語学科2年。受験レベルは同大で最も難関の、通称「外英(がいえい)」で学ぶ。社本が「大山高出身」と言っていると、同級生は驚く。無理もない。外英の受験偏差値は88で、大山高の偏差値と単純に比べると、20以上も違う。社本も高校入學時点で、外2004年度以降、同大英どころか大学進学自体合格は例がない。つらい受験勉強を耐え、上智大に現役合格した。大山高の進路アドバイザーも「進学にも物おしし」た。大山高の進路アドバイザーも「進学にも物おしし」た。大山高の進路アドバイザーも「進学にも物おしし」た。

社本が初めて参加した対話のテーマは「愛と恋」と。これは阮込みしていたが、ルールに促されるように口を開き始めた。社本は驚いた。「I love」との語彙がアルバイトで大山高生にra考えること話す男子勉強を教えている。「勉強を教える」と話す男子勉強を教えている。「勉強を教える」と話す男子勉強を教えている。「勉強を教える」と話す男子勉強を教えている。

社本も、いつしか手を挙げて「愛が子供のものだ」と思っていた。社本も、いつしか手を挙げて「愛が子供のものだ」と思っていた。社本も、いつしか手を挙げて「愛が子供のものだ」と思っていた。

▼ストーリー「キセキの高校」(高橋元氣) 詳細な記事を電子版に

です。その原動力となったのが、国語教師・橋本武先生が「銀の匙」を教科書に、徹底的に考える授業をしたことにあるといいます。この事業を通して、生徒たちには、人生とは何か、自分とは何者か、を考える貴重な時間が与えられ、結果として東大合格者が増えたということです。

偏差値 30 の学年でビリのギャルが、一年間の勉強で慶応大学に現役合格という「学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話」という本があります。この本によると、そのポイントは、「①メンタル、②目標、③計画」となっています。大学と学部を決め、その傾向と対策を把握し、そして学習計画を立ててほぼ丸

暗記状態で突き進む、がその内容です。この受験勉強の1年間の②目標と③計画は、本書の著者である坪田信貴さんが立て、①のメンタル管理と学習の時間管理も同様に坪田さんが行っています。

日本の教育は画一的であるといわれています。画一的であるからこそ、その範囲内で努力すれば有名大学も夢ではないわけです。しかしながら、この画一的から外れた事象が現れた時、日本人はそれにどう対処すれば良いか、特に前例がないと、右往左往することになります。アメリカの大学ではリベラル・アーツがカリキュラムに組み込まれています。答えなき答えを求めてディスカッションを繰り返す中から、答えを見つけ出す能力を身につけていきます。この能力が身につけば、人生を自由に泳いで行ける自信がついてくることになります。

「哲学対話」、「3年間を通して一冊の本を読み解く」。一見、効率が悪いように見えますが、これが人生に大きな恵みをもたらしていることは、上の例から見ても確かでしょう。

灘校生を東大への橋本武先生は「銀の匙」で勉強の仕方を教えた

元灘高の国語の先生、橋本武さんは、灘中学で中勘助の小説「銀の匙（初版 1921 年）」を 3 年間かけて読む教育で有名となった。これは、その授業を受けた生徒が、東大に大量入学したためとされるが、それはあくまでも結果論。この高校 3 年間の授業によって多感な生徒の心の中にどのような変化が起こったかを検証し、それを教育に活かす必要がある。

第 1 に、戦後の情報が規制された時代に、生徒たちにとっては全く未知の世界がそこに開かれたこと。

第 2 に、それらを一つずつ生徒自らが調べることにより、探求することの楽しみとその方法論を知ったこと。

第 3 に、疑問が生じた時にはすぐに調べ、考え抜いてもわからない時には質問する習慣ができたこと。

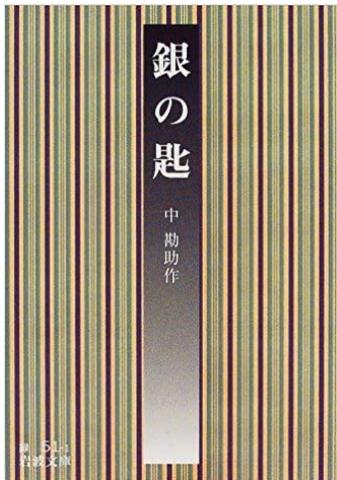
第 4 に、以上の生活習慣を通して、勉強の仕方、物事を探求する方法を身につけたこと。

第 5 に、さらに生徒は主人公「私」になって、人生を生き、日本人の教養を身につけることができたこと。

他にも副次効果はあると思う。文庫本で 200 ページ弱を 3 年間かけて勉強したわけだから、生徒たちはその内容の全てを反芻し、自分のものとすることができたと思う。要は勉強の仕方と学ぶことの楽しみを橋本先生から教わったことになる。広く浅く勉強するのも世の中をわたっていく手立てではあるが、それではいつまでたっても深く掘り下げることはできない。若い時に、たとえ狭い範囲でも、深く掘り下げる経験をすれば、それは長い人生において応用可能な知恵となり、財産となる。MBA での教育がまさにそうであるように。

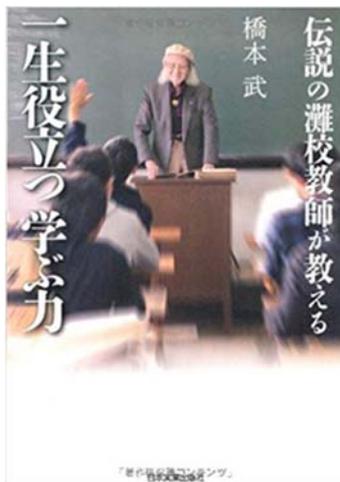
蛇足ではあるが、私の中学・高校時代には暗記力の強い生徒が総じて学年のトップであった。彼らは、数学の公式を覚え、さらに解き方までをも暗記し、それを答案用紙に間違いもなくアウトプットする。一方、理科系の人間は、数学の公式を覚えられず、その導出から始めるから、とても速度では競争にならない。しかし、大学入試のように試験時間が長く、基礎力が確かめられる試験においては、少なくとも数学では理科系の人間が勝つのである。

同じことが人生にも言えると思う。長い人生においては、定形の問題処理も多いであろうが、初めて出くわす問題には誰もが遭遇したことのない問題が多い。これを、問題意識を持って解決していくには、知識のみでは不十分で知恵が必要となってくる。学生時代はこの知恵を身につける時代で、勉強の主力を記憶にのみ回していたのでは、良い大学に入れたとしてもその後の人生を誤る可能性がある。学業秀才の転落である。



内容紹介 (Amazon)

なかなか開かなかった茶筆筒の抽匣(ひきだし)からみつけた銀の匙。伯母さんの無限の愛情に包まれて過ごした日々。少年時代の思い出を中勘助(1885-1965)が自伝風に綴ったこの作品には、子ども自身の感情世界が、子どもが感じ体験したままに素直に描き出されている。漱石が未曾有の秀作として絶賛した名作。改版。(解説=和辻哲郎)



目次

- はじめに 人は何歳でも学び続けることができる
- 第1章 「学ぶ」ことは遊ぶこと、「遊ぶ」ことは学ぶこと—
再び生徒と向き合っただ感じた学びの基本
- 第2章 生きる力、学ぶ楽しさのもととなる国語力—「読む」と「書く」のバランスが肝心
- 第3章 教えることで見える学びの本質—個性を引き出す子どもたちとのぶつかり合い
- 第4章 日常にあふれる「学び」「気づき」への横道—未来の大人たちに知っておいてほしいこと
- 第5章 つまり人生とは学びの連続—100年間積み重ねてきた生きる力の軌跡
- 特別付録 対談 遠藤周作×橋本武

内容紹介 (Amazon)

◆100歳いまだ現役で講師の、伝説として語られる国語教師！

著者の橋本武氏は、灘校一筋50年、そして今年人生100年を迎える伝説の国語教師。灘校を私学初の【東大合格者日本一】に導いた人物として知られています。いまもなお、カルチャースクールで現役の講師として活躍しています。

◆小説1冊を、横道にそれながら読み込む“型破り”の授業！

灘校は中高一貫の持ち上がり制。その中学時代の3年間、橋本氏は前例のない授業を行いました。それは、小説『銀の匙』を3年かけて、横道にそれながら、読み込むというもの。いまや時を経て、「スローリーディング」として話題を呼んでいます。

◆奇跡の授業の教え子は、著名な作家から現・東京大学の総長まで多士済々！

教え子には、作家の遠藤周作、神奈川県知事の黒岩祐治氏、東京大学総長、東京大学副学長、最高裁事務総長、日本弁護士連合会事務総長数など、日本の各界の識者、リーダーがいます。橋本氏の教えがいまの自分を形づくっていると教え子の皆さんは言っています。

▽▽学ぶ」ことは遊ぶこと、「遊ぶ」ことは学ぶこと▽▽

▽▽もっと横道にそれてみよう▽▽

▽▽すぐ役立つものは、すぐ役立たなくなる▽▽

橋本氏が授業を通して教え子に本当に伝えたかったこととは何でしょうか。

横道にそれながら教えた「一生役に立つ 学ぶ力」とは何でしょうか。

橋本氏が“本格的に初めて語り下ろす”心からのメッセージです。



目次

- 第1章 金髪ギャルさやかちゃんとの出会い
- 第2章 どん底の家庭事情、批判にさらされた母の信念
- 第3章 始まった受験勉強、続出する珍回答
- 第4章 さやかちゃんを導いた心理学テクニックと教育メソッド
- 第5章 見えてきた高い壁—「やっぱり慶應は無理なんじゃないかな」
- 第6章 偏差値30だったギャル、いよいよ慶應受験へ
- 第7章 合格発表と、つながった家族

内容紹介 (Amazon)

有村架純主演の映画も大ヒットした、「笑えて、泣けて、最後には自分自身も“絶対無理”にチャレンジしてみたくなる」との大反響を得ている感動の実話小説。通称ビリギャル。

本作は、高校2年の夏にして学力は小学4年レベル、全国模試の偏差値は30、英語はかろうじてローマ字が読める程度だった金髪ギャルのさやかが、塾講師である著者・坪田信貴から心理学を駆使した指導を受けてやる気に目覚め、I, my, me, mine を覚えるレベルから始めて1年で英語の偏差値を40上げ、ついには最難関レベルの私立大学である慶應義塾大学に現役合格するまでの1年半を綴ったノンフィクション小説です。

所属する高校から当時、たった2名しか慶應義塾大学に受からなかったその1枠に、学年

でビリだったギャルが入ったその奇跡を描いた本作は、単行本の発売から1年半で累計100万部を突破するほどの支持を受け、2014年度新風賞も受賞しています。

ギャルのおバカ発想に大いに笑えて、その頑張りや苦闘ぶりに涙できる感動作で、受験物語とともに、崩壊しかけていたギャルの家族の再生をも同時に描いているため、10代から中高年までの幅広い層からの支持を得ることに成功しています。

1300人以上の子ども達を個別指導した経験から、「地頭の悪い子などいない。どの子ども、可能性に満ちている」「ダメな人間なんて、いないんです。ダメな指導者がいるだけなんです。でも、ダメな指導者も、ちょっとした気づきで、変わるのです」という著者による、子どもや部下のやる気を引き出す心理学テクニックも満載（※角川文庫版では、そうした心理学テクニックや受験テクニック等の実用情報を大幅に削除し、物語だけを純粋に楽しめる形での再編集が施されています）。

読みがなもたくさんふられており、「さくさく読めて、やる気になる！」とご好評をいただいている本作を、ぜひよろしく願いいたします。

※なお、本のカバー写真は、石川恋というモデルを撮影したものです。ギャルさやか本人ではありません。